

# 加藤周一さんの「お別れの会」に寄せて

国際的な知識人として。その国際化は欧米がスタートした。

知られ、昨年12月に先進国の主導で進められ、亡くなった評論家、加藤周一さんのお別れの会が21日に行われる。その準備にかかわる中で、加藤さんのあまり知られていない思いが浮かんで来た。

藤周一さんのお別れの会が21日に行われる。その準備にかかわる中で、加藤さんのあまり知られていない思いが浮かんで来た。

88年、加藤さんが立命館大学国際関係学部客員教授に赴任されて1年あまり過ぎたころ、私は研究室を訪ね、次のように切り出した。

「いまや政官民こそって国際化の合唱で」

がスタートした。

創刊号の巻頭で加藤

さんはいこう述べている。「この雑誌の課題は、被支配者の内側への接近であり、見られ

る側から見ることであり、世界がどう見えるか。これは非常に重要な問題だね。協力しましょう。」こうして91年3月、雑誌「グリオ」第三地域から世界へ(平凡社、年2回発行)

さらに、京都という



『グリオ』の創刊シンポジウムで語る加藤周一さん=91年、京都で、筆者提供

# 「9・11」後の世界を予言

知識人とはいえ決して高踏的ではなかった。こんな言葉も覚えて

世界秩序もあったものじゃない。「9・11」同時多発テロ後のアフガン、イラクへと広がる混乱をまさに予言していた。

多角的に時代や社会を見ることも、バラ



片岡 幸彦

都市の魅力にも言及していた。「日本から世界を見る場合、欧米大

京都を大事にしなさい。その後、京都の

基本的な人権だけは認め

て良いが、18世紀のそれとその後

の会」は21日午後1時から東京・有楽町朝日ホールで。

おこわりの美 京都 芸大130年」は休みました。

\*

加藤さんの「お別れの会」は21日午後1時

から東京・有楽町朝日ホールで。

連載「都

美 京都 芸大130年」は休みました。